



浦島伝説

令和6年11月29日

第26号

らくごか かつらこきんじ ぜんざ かなぎやこさんじ
 落語家の桂 小金治さんは前座のころ、柳家小三治(のちの五代目
 小さん)さんの自宅へ毎日稽古に通ってました。当時の思い出を
 ちよしょ みるわた だし こんせつ
 著書「ケラの水渡り」に書いています。弟子でもない若者に懇切に



桂 小金治



柳家 小三治
(五代目小さん)

はなし
 断を教え、終わると、白いご飯を食べさせてく
 れました。終戦から数年、まだ食糧難のころ
 で、小金治さんは毎度の銀シャリ(白米のこと

:当時はなかなか食べられなかった)が楽しみであつ
 たといいます。ある日、いつものように満腹になって



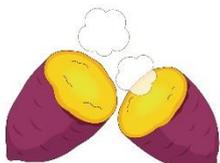
どちゅう ぶさい
 帰る途中、忘れ物に気づいて戻ると、小三治夫妻が子供と昼飯を食
 べていました。粗末なサツマイモでした。小金治さんとはまどい、胸を

つかれ、帰りの電車で泣いたといいます。申し訳なさに、もう稽古に通うのをやめよう
 と思い、師匠の桂小文治さんに相談しました。師匠は言いました。「大バカやな、お前
 は。小三治はお前に落語を教えているんやないで。落語ちゅうもんを、この世に残して
 いるんやないか」と。

おそ げい う つ しょく けす
 教わり、芸を受け継いだ人がやがて、おのが食を削って(自分の食事代を削って)ま
 で次の世代にそれを引き継ぐ。落語に限るま
 だんとうげいのう だんとうぶんか
 い。伝統芸能、伝統文化は、数知れない人々が
 こころざし
 「志」の細い糸をつないでここまできたの
 でしょう。小さんさんが87歳で亡くなって
 さんごろう
 四年後、長男の三語楼さんが六代目を継ぎ、



しゅうめいひろう こうぎょう
 襲名披露の興行を行いました



しょくたく
 た。あの日、サツマイモの食卓にいた幼い子供です。